

家庭科教育の昭和史とともに生きる―宮原小治郎小伝

## 第一部 あるジャーナリストの生い立ち (5)

佐々木 享  
(名古屋大学教授)

### 普通体操の免許を取得

宮原小治郎が最初に取得した中等教員免許の教科は、いわゆる普通体操ではなく、「体操（兵式体操）」であった。明治中期の師範学校を含む中等学校の体操教育には、普通体操と兵式体操とが共存していたのである。

初めて近代的な学校制度の創出を目指した一八七二（明治五）年の「学制」には、「体育」と称された教科が含まれていた。後の「体操」の原型である。しかしこの時期には「体育」の実体はなく、実際上の体操教育は、一八七八（明治十一年）年には文部省が創設した体操伝習所の教育に始まった。アメリカのアーマスト大学出身のリーランドの指導を受けたこの体操伝習所の卒業生が全国の師範学校などに分散し、少

ずつ体操教育を広めたのである。リーランドが導入したいわゆる普通体操は、徒手体操を中軸として健康増進を目指すものであった。

文部省が導入した普通体操とは別に、陸軍省は、将兵の体力向上と鍛錬という観点から、軍隊教育の一環として歩兵操練を早くから取り入れていた。これを定式化したのが歩兵操典である。将兵教育の一環であった歩兵操典には文部省も注目するに至り、明治中期には、これが男子中等教育における体操教育の一環として、正科とされるに至った。すなわち、一八八六（明治十九）年の中学校令が尋常中学校と高等中学校について、また師範学校令が尋常師範学校と高等師範学校について、必修科目としての「体操」で普通体操と兵式体操とを課することを定めたのである。兵式体操の中心は歩兵操典であった。こうした中で、初代の高等師範学校長に現役の陸軍大佐山川浩が任せられるなどのこともあり、男子師範と中学校に関する限り、「兵式体操」の方がむしろ優位に立つ状況が現出した。「至上命令に対しての服従、戦友間の協力、指導者としての指揮能力の養成」をねらいとする兵式体操は、当時台頭していた国家主義的な教育思想に合致していたが故に、急速に力を得たのだとされている（岸野雄三「体操教育史」）。小治郎が兵式体操を選択した理由は分かっていないけれども、中等学校の体操教師を目指す者が兵式体操を選ぶの

は普通のことであった。その内容が歩兵操典として定式化されていたので、受験しやすかったという事情もあったのである。

※筆者は、この連載第三回で日本体育会の講習会を紹介した際、「小治郎がこの講習を受けたのかどうかは分かっていない」と述べた。これを書いた後、一九〇五（明治三十八）年に書かれた文章中に、「吾人が牛ヶ淵にて棍棒を振りし時代……」とあるのを発見した。牛ヶ淵とは日本体育会の所在地であるから、小治郎は同会の講習会に参加していたと見てよいであろう。

しかし、小治郎が就職したのは兵式体操には無縁な高等女学校であった。正規の教員であるにせよ、「助教諭心得兼書記」という、いわば教諭の下のそのまた下の地歩に位置づけられ、月俸二〇円という中等教員としては低い給与しか与えられなかったのは、免許教科の違いに由来したに違いない。このように扱われたことは、もちろん、小治郎には不本意だったであろう。高等女学校の教師という職に就いたことに安住しなかった小治郎は、さらに勉学を続けた（確証はないが、再度上京して日本体育会の講習を受けたのではなからうか）。こうして再び試験検定に合格し、上田高女に就職して二年目の一九〇二（明治三十五）年十二月九日付で、師範学校女子部高等女学校の体操科の免許状を取得した。

担当教科に関して正規の免許状を取得した小治郎は、一九〇三（明治三十六）年一月には助教諭に、同年九月には教諭に昇任し、俸給も二七円となった。

#### 体操教育の勉強家、宮原小治郎

小治郎は、いわゆる正規の学歴は小学校のみで、あとは独学で小学校、中等学校の教員資格を取得した。この勉強がたんなる上昇志向のためだったとは思えない。中等学校の体操の教師となってからもその地位に安住せず、体操教育について一家言を持つほどに勉強を続けているからである。

小治郎が上田高女の教師になったころ、わが国の体操教育界は一つの転換点にさしかかっていた。形式的鍛錬に流れやすい兵式体操の難点が自覚されるようになったこと、スポーツや坪井玄道の紹介した遊戯が注目されるようになったこともその一面であった。しかし、リランドを通してわが国に導入されたいわゆる普通体操の原型がスエーデン体操であったことが知られてきたことは、いっそう重要であった。この「純スエーデン式」（岸野）体操は、アメリカに学んで一九〇二年に帰国した川瀬元九郎、直接にスエーデンで学び一九〇三年に帰国した井口あぐりにより紹介普及し始めた。時代の変化に即応するため、文部省は、一九〇四（明治三十七）年一月に川瀬、井口、坪井を含む八名の体操遊戯取調委員を委嘱し（委員長は沢柳政太郎）、体操教育改革の方途を調査

審議させた。同委員会は、翌一九〇五（明治三十八）年十一月に調査結果を報告、「所謂瑞典式体操ハ大体ニ於テ採用スヘキモノ」とし、採用すべき体操の内容を詳細に示した。これにより、体操教育方向転換の方針は定まったと言える。

これにより先、小治郎は『信濃教育会雑誌』第二三〇号（一九〇五年十一月）から二三六号（一九〇六年五月）にかけて六回にわたり、「教育的体操とは何ぞ」と題した論説を寄稿した。この論説の当初の企図は、

一、瑞典式体操の組織及一般を摘要し、次に  
二、安井哲子氏が帰朝当時予におくれる 英国体操法の原則と

三、ワイトレー氏が米國に於て主唱応用せる体育の方法とを列挙して これが比較評論を試み 併せて

四、普通体操を批難するの何故なるかを質すと同時に却つて応用の範囲広く 千変萬化興味は津々たる事を明にし  
五、徒手体操（改正柔軟体操）の能く論理的に研究せられ其方法の簡にして 効益の大なる事

六、部隊教練の有機的に組織せられて 教育の目的に接合するの価値あるを信じ兼て其材料の豊富なるを認め 兵式教練の不振を叫んで 往事の盛大を羨み

七、最後にこれが統合統一を企て 所謂教育的体操としての真価を論述し

八、附録として現下の体操界を瞥見し これが妄評を試みるところにあるとされた（『信濃教育会雑誌』第二三〇号）。

大風呂敷で始めた連載は、第二回が終わったところで前記の体操遊戯取調委員の報告書が官報に発表された（一九〇六年一月十五日）ため、予定を変更してこの報告を論評するものとなっている。とはいっても兵式体操に関する事項が割愛されたにとどまり、基本的な論旨を変えたわけではなかった。

小治郎は時代の趨勢を的確に読み取るほどの勉強家だったと言えよう。（この論文から、小治郎が当時の有力な教育雑誌であった『教育時論』を購読していたことが分かる）。

なお、右の引用文中の安井哲子は、女高師を卒業後、一八九六（明治二十九）年に母校からイギリスに留学、一九〇〇年に帰国して教授となった安井てつを指すと思われる（安井は後、東京女子大学創立に参画、その二代目学長となった）。小治郎が安井にいつ面識を得たのか不明だけれども、その交際の広さには驚かされる。

まず府県立学校の教員を集めて講習会を開くべきだという先の調査報告の勧告に従って、文部省は一九〇六（明治三十九）年八月に各府県代表の体操教師五〇余名を集めて体操科講習会を開いた。小治郎は長野県から選ばれて参加し、この講習会についての感想を書き残している（『我期待と我予望』）

『信濃教育会雑誌』第二四一号)。報告書の精神を發展させることが大切なのに、各講師間の主張に連絡がなく、むしろ矛盾撞着があるとするなど筆鋒は鋭い。勉強家にして書き得た文章である。

#### 体操教育界での活躍

小治郎は、単に論説をこととしていたわけではない。例えば『信濃教育会雑誌』によると、前述の連載を始めた一九〇六(明治三十九)年一月に、上田女子体育会主催の舞踏講習会が上田高女を会場にして開催されている。講師は東京体操学校卒の名取、小林と宮原小治郎で、楽曲は上田音楽隊主事松平。「元来正式の舞踏が本県に行はれざりしが」「講習員中には女子師範生徒長野高等女学校教師及郡下主脳たる専門家の多ければ予想外の進歩熟練を為せり」とある(前掲誌第二三二号)。この上田女子体育会は一月三十日にも上田高女で研究会を開いており、「宮原理事の報告模様等ありて数番のダンス及びピンポン等あり会する者百名余」だったという(前掲誌第二三三号)。明記されているわけではないが、上田女子体育会なるものは、小治郎が組織したのではなからうか。

同じ雑誌は、同年三月二十五日から二十九日まで上田体育研究会主催の体操遊戯講習会が開かれたことを報じている。講師は、女高師教師高橋忠次郎、上田体育会理事宮原小治郎

の二名で、受講者としては県下全域から七三名が参加したという(前掲誌第二三五号)。

小治郎はまた、同年八月二十四日から三十日まで下水内教育会主催の夏期講習会に体操科の講師として参加している(前掲誌第二三八、二四三号)。またこの翌年一月には、上田町体育研究会が宮原小治郎ほか数名を講師として体育の学理研究講習を行っている(前掲誌第二四三号)。

以上は、『信濃教育会雑誌』から小治郎の参加が明記された記事を拾いあげてみたものである。小治郎自身がこの年の信州体操界は「一頭地を抜きんで賑か」であり、特に、報告書に準拠した三月の下旬の評論的講習会は「日本帝国の広大なる実に我信州を以て嚆矢なりと云ふ」と誇らし気に書いている(「三十九年に於ける信州の体操界」前掲誌第二四四号)。この論説記事の書き方、上田女子体育会の第一回研究会が一九〇六年一月だったことなどを見ると、講習会、研究会等における小治郎の大活躍は、この年に始まったものと思われる。この年以後にも、長野県では夏、冬に体操を含む各種の講習会が開かれているけれど、なぜか出席した講師名の記載がなくなってしまうので、小治郎の活躍の状況をつかむことは残念ながらできない。なお小治郎は、「学校遊戯としての舞踏」(『婦女新聞』第三六二号)という短文も書き残している。